

「御詠治郎吉格子」「弥次喜多 尊王の巻・鳥羽伏見の巻」



佐藤 忠男

映画評論家
日本映画学校校長

大河内傳次郎（一八九八～一九六二）は一九二〇年代末から一九三〇年代における時代劇でトップの人気を競ったスーパースターである。その後も風格の大きな、悲劇も喜劇も見事にこなす名優であったが、とくにサイレント末期に伊藤大輔監督、唐沢弘光カメラマンと組んだ一連の作品はファンを熱狂させると同時に芸術的にも高く評価されたものであった。ただ残念なことに、有名な「忠次旅日記三部曲」が三分の二程度残っている以外は断片しか残っていない作品が多い。なかでほぼ完全なかたちで保存されていたのがこの「御詠治郎吉格子」（一九三一）であり、これが保存され得たということはマツダ映画社の松田春翠の大きな功績のひとつである。

伊藤大輔（一八九八～一九八一）は劇作家志望の青年として一九二〇年頃からシナリオを書きはじめ、一九二四年に監督もするようになった。一九二六年、舞台俳優から日活京都撮影所に移ってきた大河内傳次郎の資質にいち早く注目して「長恨」に主演させて、そのデモーニッシュな演技で撮影所中をあっと言わせ、つづいて名作「忠次旅日記三部曲」（一九二七）でファンの熱狂を引き起こした。猛烈な移動撮影を多用したところから、伊藤大輔＝イドー・ダイスキと仇名された伊藤のダイナミックなイマジネーションを実現させるために、カメラマンの唐沢弘光は体にカメラを縛りつけて立回りの群衆の中にカメラのクランクを回しながらとび込んで行って撮るといような破天荒な撮影をやったのけたと、当時同じ撮影所でカメラ助手だった宮川一夫は語っている。

「治郎吉格子」はそうした猛烈な殺陣シーンで評判になったこのトリオの一連の作品のなかでは比較的静かなおちついた人情ものであり、怪物のような大暴れで評判だった大河内傳次郎のもうひとつの別の面、自分のために辛い人生に耐え、自分のために進んで犠牲になってくれる女たちを思って苦悩し、ひそかに涙する男という面を微妙なニュアンスをこめて演じている。相手役の二人の女を演じた伏見直江、伏見信子は姉妹で、姉は姐御肌の大女優、妹は純情な娘役として現代劇でも人気があった。

大河内傳次郎は豪快な剣戟スターである反面、また喜劇も得意だった。「弥次喜多・尊王の巻」「弥次喜多・鳥羽伏見の巻」（一九二七）はその一例である。監督の池田富保は当時の時代劇の正統派の大監督のひとりであり、相手役の阿部五郎は立回りで人気のあったスターのひとりである。正統時代劇の面々がここでは喜劇で軽妙なところを見せている。